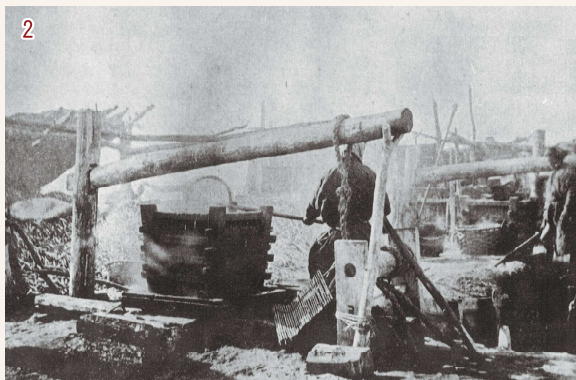


東日本一だった樽前浜のイワシ漁

ほやし じゅう うえもん びひ

⑨ 林 重右衛門墓碑



江戸時代から明治にかけて苦小牧の勇払から白老に至る一帯は樽前浜と呼ばれ、5～6月頃から前浜に押し寄せるマイワシを地曳網で獲るイワシ漁が盛んでした。そして、獲られたイワシはメ粕という肥料に加工されていました。江戸時代中期以降、生糸や綿などの商品作物の需要増加に伴い、それらの原料の肥料として使われたメ粕の需要も高まりました。苦小牧産のメ粕は、品質の高さから全国的な名声を得て、全国各地に輸送されました。

当時のイワシ漁は、魚を獲って、煮て絞って乾燥させてメ粕にし、俵詰にするという一連の作業を行うので、小さい漁場でも30人、大きい漁場では

林重右衛門墓碑

市指定有形文化財 昭和54(1979)年7月4日指定

所在地：苦小牧市字錦岡238番地7

所有者：苦小牧市

管理者：苦小牧市教育委員会



200人を超える人員を要しました。漁場は、現在の勇払から苦小牧中心部までは、場所請負人の持ち場で10場所ほど、苦小牧中心部から樽前にかけては漁業出稼人の持ち場で、出稼人たちが多くときには50場所ほどあり、その規模は東日本一とも言われていました。樽前浜の出稼人たちは、漁獲の二割を請負人に支払い、八割が自分たちの取り分となる仕組みであったため「二八取り」とも呼ばれていました。

この頃は、樽前浜のイワシ漁が大規模漁業として確立した時期で、南部異国潤で漁業を営む網元の林重右衛門が大勢の出稼人を指揮していました。重右衛門は代々受け継がれる名で、天保2(1832)年に林重右衛門が亡くなったことから、西松という名の息子が、重右衛門を襲名し、5代目林重右衛門となります。しかし、襲名からわずか7年、39歳の若さで病死しました。

錦岡にある墓碑は5代目のもので、林家の「三(みつひき)」の屋号があり、箱館の場所請負人、井筒屋大橋久右衛門が、林重右衛門の霊を弔うために建立したものとされています。

弘化2(1845)年、この地を訪れた松浦武四郎は『初航蝦夷日誌』の中で「豊漁期にはアイヌの使役もあって樽前浜

は商人の出店や茶屋も建つほどの盛況を極め、その繁栄は東部第一なり」と記述しています。錦岡にある市指定の有形文化財「林重右衛門墓碑」は、苦小牧におけるイワシ漁の繁栄を表わす貴重な資料となっています。

※1 地曳網(じびきあみ)
網を沖にはりまわし、陸上から網を引き魚をとる漁に用いられる漁具のこと

※2 メ粕(しめかす)
肥料として使われた、魚から油を搾り取ったかすのこと

※3 商品作物(しょうひんさくもつ)
商品として売ることを目的として栽培される農産物のこと

※4 異国潤(いこくま)
現在の易国間、青森県下北半島にある地名

※5 網元(あみもと)
網などの漁具を所有し、多くの漁師を雇って漁業を営む者

※6 襲名(しゅうめい)
親や師匠などの名前をつくこと

※7 屋号(やごう)
苗字とは別につけられた称号

写真の解説

1 錦岡地区にある林重右衛門の墓碑 2 メ粕製造風景。樽前浜でとられたイワシは、すぐそばで大釜で煮て粕と油により分けられてメ粕が作られた(目で見ると苦小牧の百年) 3 イワシ地曳網揚げ風景。イワシの大量が寄ってきて海の色が変わると、2隻の船が海に出て網を投げ入れる。網を入れ終わると、網の両端につなげた網を船が陸に持っていき、漁夫がそれを引き揚げた(目で見ると苦小牧の百年)